関寺小町

次第

待えて今ぞ秋にあふぐ星合の

まつるよをいつの世

詞

是は江州関寺の住僧にて候今日ハ七月七日にハ児と伴ひて講堂の庭に出て七夕乃祭を執行候又この山陰に老女のいほりを結ひて候が哥道をきはめける由

雨中は雅におもしろき美人さらな
ともなひやばや女の物語なれど
篠つりや悦春の諷しく涼
風に裏紫と一時に来ぶ秋乃
七月ゑみふりやふかぬ きね
七夕のたなばたとて糸竹呂律の
さゝみざとをさはくして夏島の

花をまつひおとへてく
緞や錦のりさはきり袖をも
そへて秋草の露乃玉ことのきき
なかれ松風まんもおわりし浪
手向よりるふ捨てふ遥り艶く
絹み一鋒をえさき比丞草序よ
あきりし草れ以乃はうへなさ

下
のゑせて袂ともなきぬふに便
なしむ老雨乃ふるよはて
く流れ行方を小町ひとり顔を
風よあらむものれて跡やうやなき
たれがうへ、さつつよわの洪あし
浮かんの老乃身くひす露もし
さへはわの衣八重とも昔よ

うへ思ひ縁はなしあらしふきさ
逃しや恋こしうらひしや
中詞
いつより小町よりへつらふ事深く
ばせい浅関寺に住老女と申しば
るの此まま歌なる稽古ゆへくるめ
老女乃待てる彼似及大ならひて
ずなし、老のやうなるもとひゆ

又伝物語をも語りしけしてあみ
児どもも桃ハ伝出ゆへ作
（ミテ詞）是ハ思ひもよらぬ事を語る
ものゝ飛せも秋木ならハまさぬ
さとくなわが花薦種よまれへぬ
よしもあし汲心をこゝろとして
言葉乃葉色ぞうまはなかり

見ぬうなゐをさゝらせずやさしくも
おそなふ人ゝ哀情心よ俳諧
もののな（口伝詞）先ゝあはれゝ人の
もそあふひん無数波浪の哥を
もはやそ尽しふひとの姫よむ
いゝ画ふよしなきしぬよなふ
（ミテ）うた哥ハ神代よりわりしき物也

文字乃数定まらでことの心
分きがたかりしを人の代と
成てめぐれたのましよ詠歌
よみおきめし哥なれハとて
難波津のうたをもてあそひハ
ワキ詞
あさかやまの哥を大君の
御心を慰しき遊べよ見え
めぐみ浅き哥なふ
シテ
実よく
しれ竹ひうわけこの哥を父母
として
ワキ上カル
手習ふ人養ふとまて
シテ詞
うつそやしき人なをもやめし
ワキ
我邦室國のひ國人や
シテ下
かまて
ことふみの唐人まのくし
ワキ
寸くなり
心に
シテ
住江の海藻
上音
依く波や

はまちどり跡はくちともしく

行すゑと末ハよもはてし

松乃葉のちりうせずして松の葉乃ちりわ

うつりぬとも心とおもひかしぬ哉

たとひ時うつりことさるとも

此哥の文字あまたあれども

ゆるさしやく　貫之作

かはな哥人衰ちと葉木かしくさ

い色せ女の哥ハ錦なる乃老

女乃清子ためしに雕子こう

ゆへ哉きこのもつまよひなわ

そここより哀ぐも乃かはりひ

のてきしもそ女乃うく

ほめ　是ハいまし太道外家

此哥也衣通姫とハ允恭天皇の
きさきみよみし海ーすし哥流
こしく哉ホもしとかまひめ表
流をこうまなひん ー さこえを
衣通姫の流を下なひ給ふうや
ば年ゆえよ給小野小町こう
ずとかわひめ社流とは思ひ私

平詞

わびぬれハ身をうき草乃根を
たえてさそふ水あらハいなん
とぞおもふ是ハ小町の哥なる

ニテ下

ーーーーーーーーー
ゝ秘の大江の雅成ゝ心うちわ
ーーーーーーーーー
きーかとよ世中物字かーま

詞

文屋の康秀か三河掾になりて
まうわー時因念まん心なも

なくさめよりし心も我をさしそう
下｜｜｜
ひし証より見しうらなりや忘て
ニ、｜｜｜、｜｜｜｜ニ｜
逢を證しものなぎさは源乃
｜、｜、｜｜、ニ、ニ、、
小序こと思又思りなく也さよ
口上詞
不思議や聞ひぬまゝは若寄る
ゞやり讀よ置しと申すもさ衣通
姫の流と申す文は歌も小町なれ

ゞ実逢月をの笠かね小序は老女ハ
百に年よふといゝ色大猴小町乃
なかしかは世ゞさこさ世に
そ恥なぞなれハゞと無うす所も
欺く浮力無小町のはてぞとよ
上ゞ、｜｜｜｜、、｜｜｜、｜
ゞそのみ欺ほし見紛ひろとよ
ニ上ゞ｜｜｜｜｜｜｜、、ニ｜
いやこまちとはいはれしや髪

上ウ門
みえて嬉しきうつゝよ見しもの秋
まことあふも乃世中のひと恋
心乃り顔や見ゆふりしや
まひぬまは力なうらみの秋なさ
しくてざそふ水あらましとも
らなんとうあもりふりはしや
クリ門
実やみはしめとも袖よ太りしぬ

志つ乃ハ大坂見ぬめ乃渡の雨
ふることのみを思ひ寝深げ顔
志ぬ袂よ留力のはそなま
白露乃見残なしむ思ひほし
ぬまりや人恋みえたしせ恨後
しもそのみえ力に上にながらへ
きぬは年月を縮め逢ひのへて

或秋の露結霜まで、夜寒露し
せし萩薄もうれしさわ虫の
すゑにりきさるとなれて槿花
一日乃栄なりおなじなほ
雁くなきハ草ハりふよ乃中に
露にたまさのねまよふなみの世と
ふきし事ハも露のつげなき

草露もさむし菊なても鶯里
人ハ露乃にのなれやかりなき
ごし衰せしや忘乃りし衰
古乃菊やと思ひし時ハうつろもふ
かなきよみかなる行菊衰さめて
ちハふ秋の夜を送しさ寝覚する
りましへ是ぞ一夜とますしやさ

きのへも瑠璃なりそわが身へ金
花座のげ又よい水晶なせ行く雲
はるし寶輿唐車好むきぬの色城
かさわて妻ぬの花咲く妻座乃
得まし人の道の蓮乃露ミ志とこ思ひ
求むゐし露し力なう花せざい
はよぬ乃こやたなを志ゐし床

なりけり　聞る乃鐘のおと諸行
無常ときくなれとも耳にも成
やくもあし送坂好山風乃是生
滅法乃おとたかなもえはこう
花落葉の折くにしに悟れず
とくに巻衣よ硯をなし添て
ぬてなそうめんもし同夢がかくや

玄冬素雪の寒く葛成やう
ゆかしく清よし清よかゝるぬ糸
なう朧乃哥なからに中かしく
秋ひ秋月のよりかゝりはそう
也しき
詞
いつ小中は七夕の糸
なうなをかは
詞
いまや女は煮
くれしきんき七夕乃手向乃

詞
あうひをはちくて清流んくん
いやく老女の事いは将まん
誰よ思ひしよめ涙く
昔し
のきぬるりたくく清出仏ん
七夕の織糸竹乃手向及いうそ色
へて、のし老乃姿小野小町の
百年よ及ぬや天津あひ乃

雲の上人に別きし袖も色添
麻衣乃淺葱やいろはしらめも
おもしれぬ有様ぞなら宵ハ
七夕祭しく手向乃數もさゝ巻
なのふひハ系竹ようちきて廻りに
色の露あをきハ童蘂乃袖次
面白な星まつるなり呉竹の

三テ上
世に經ても世りの末の代々
久しさそ萬歳樂 三テイロ 慈面白茶
咲ちの蘂花袖や風着見の風乃
五節乃舞姫が袖ふる宮處し
しのばしいまさ七夕の手向の袖
なかつた七夕しほれや香つよ
イロ
狂人走れ不狂人も走るともや

との童籠乃袖よひゐれて狂人
こゝろ立ゝ百年を百色を
嵐よ花衆ゝ胡蝶乃舞ありける
なかく老木に花の枝さしく
袖もたまらぬ花ぞもあし
よしくたゝよふ波乃うき
すふ袂りひふの色をとも者よ

ゑく色く袖八あつまさつあつ
花し君りよしへや風太極よ
花娘の几しゝ秋りや明るさの
関寺乃鐘とわ成し諸衆よ
告やよ淋志のこゝめ我能百まも
なかは恥りし蝶々わのく
ごの色袂もよもかしいとは

中々りん歌とみえ杖をすり立て

まわく思ひ乃かけ座り

悩りわ面影の事は思ひ出えて

小町りりそ養なわらわく